刑　法

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。

Ⅱ　解答用紙は１枚配付します。

Ⅲ　解答にあたっては、黒のボールペン・黒インクのペンのいずれかを使用してください（ただし、インクがプラスチック消しゴムで消せないものに限ります）。それ以外で解答用紙に記入した場合は、無効とします。

Ⅳ　解答を訂正するときは、訂正部分が数行にわたる場合は斜線で、１行の場合には横線で消して、その次に書き直してください。修正液・修正テープを使用してはいけません。

Ⅴ　設問が複数の場合は、解答用紙に設問番号を明記したうえで、解答してください。設問番号の記入がない場合は、無効とします。

Ⅵ　試験時間は 60 分です。

Ⅶ　問題は１ページにあります。

刑　法

A組という暴力団の構成員である甲（45歳、男性）は、甲によるA組の資金の私的流用が発覚したことから、A組組長のBらに、A組が管理するマンションの一室に閉じ込められ、制裁と称して断続的に暴行を加えられていた。3日後、甲がすっかり衰弱していたところに、Bらが隣室で「今日の深夜、甲を海に連れて行って沈める」旨の相談をしているのが聞こえてきたことから、このままでは殺されてしまうと恐怖を感じた。その日の夜7時頃、部屋にいるのがBの配下のC（35歳、男性）だけになったので、甲は警備が手薄なうちに逃げようと考えた。ただ、甲が閉じ込められている部屋は納戸のため窓がなく、外に出るにはCのいる隣室を通らなければならないが、連日の暴行によって衰弱していた甲は、この状態で屈強なCと対峙しても勝ち目はないだろうと考えるうちに、部屋の片隅に石油ストーブがあることに気付き、火事の騒ぎを起こして、その隙に逃げることを思い付いた。

甲は隣室にいるCに気付かれないよう、石油ストーブの給油タンクに入っていた灯油を自分のいる室内に撒き、持っていたライターで灯油が染み込んだカーペット敷の床に点火したところ、火が燃え広がった。Cが異臭に気付いて室内に入ってきたタイミングで、甲はCを突き飛ばしてそのまま逃げ出した。火はCによって消し止められたが、室内の床や壁、約20平方メートルが焼損するに至った。A組が管理するこの居室は鉄筋コンクリート造10階建総戸数50戸のマンションの8階にあり、事件当日も多数の住民が生活していた。

甲の罪責を論じなさい（特別法違反の点を除く）。

以　上